

生徒役員育成マニュアル



平成27年8月修正版

目 次

ページ

1 はじめに

1 生徒役員としての心構え

I ラインジャッジ編

1. 基本姿勢とフラッグシグナル

2 (1) ボールデッド時の基本姿勢

2 (2) ラリー時の基本姿勢

2 (3) ボールイン

3 (4) ボールアウト

3 (5) ボールコンタクト

3 (6) アンテナ、ロープ、支柱、サイドバンド外側のネットに触れた時

4 (7) その他

4 2. 1つのラリーにおける動きの流れ

3. 判定のしかた

4 (1) ボールと床の接点

5 (2) ライン判定

5 (3) ボールコンタクト

4. トレーニング・マニュアル

5 (1) ルールに関する知識

6 (2) 基本的トレーニング

6 (3) 発展的トレーニング

7 (4) コンビネーションに関するトレーニング

7 (5) アンテナ接触及び許容空間外側通過のボールに関するトレーニング

II アシスタントスコアラール編

9 1. リベロに関するルール及び取り扱い

9 2. 位置

9 3. 役割

10 4. 実際の手順

10 5. トレーニング・マニュアル

資料

リベロコントロールシート

リベロコントロールシート記入例とポイント説明

生徒役員育成マニュアル

はじめに

公益財団法人日本中学校体育連盟バレーボール競技部審判規則委員会では、これまでに各都道府県中体連バレーボール部所属審判員の資質向上と、円滑な大会運営のため、「基本方針」を示すとともに、その基本方針達成のため、各種の情報発信及び研修会等を実施しています。

このラインジャッジ指導マニュアルは、前記の取組の一環として、全国の中学校のバレーボール指導者が、大会出場の際に必要な生徒によるラインジャッジ及びアシスタントスコアラーの指導にかかわる方向性を示すものであります。

特に、初めてバレーボール部の顧問となった指導者においても、統一したラインジャッジの指導が行えるよう基本事項を中心に作成しています。

なお、本マニュアルは、中学生が理解し実践できるものを目指しているため、公益財団法人日本バレーボール協会（JVA）審判規則委員会が作成している、ラインジャッジマニュアルとは若干異なることをご理解いただいた上で活用されますようお願いいたします。

生徒役員としての心構え

バレーボールにおける試合のための審判団は、主審、副審、記録員、アシスタントスコアラー（以下「AS」と表現する）、ラインジャッジ（以下「LJ」と表現する）、点示員で構成される。

生徒役員として試合に携わる生徒は、審判団の一員であることを自覚し、緊張感をもって与えられた役割に取り組むことが必要である。

指導者として以下に示す内容の指導を心がけていただきたい。

- ◆試合を成功させるために「気持ちのよい態度」「きびきびした行動」を心がけること。
- ◆担当審判員の指示に従って行動すること。
- ◆服装、身だしなみを整えること。
- ◆長い試合になっても集中力が途切れないように、体調を十分整えて試合に臨むこと。
- ◆設定時間（集合時間）に間に合うように、余裕をもって行動をすること。
- ◆自分が担当するチームの試合や練習を見て、チームや選手の特徴を把握したり、仲間のLJの試合中の動きなどを観察したりするなど、研究して自分の判定に生かすこと。
- ◆個人での勝手な行動をとらず、審判団として常に連絡を取り合うことができるよう、待機、休憩、食事などをすること。

I ラインジャッジ編

1. 基本姿勢とフラッグシグナル

(1) ボールデッド時の基本姿勢

- ①コーナーから約2 m離れた位置に立つ。
フラッグは自然に体側に沿わせる。(写真1-①②)
- ②基本姿勢として、ラリー終了時は、一旦、写真1-①の姿勢になり、サービス開始前に写真1-②の準備姿勢になる。
- ③フラッグは、ポールに人差し指を添えて持つ。(写真2)
- ④フラッグシグナルは、見栄えよく示すように心がける。
- ⑤左側からのサービスの時は、サーバーの邪魔にならないように、サイドラインの延長線上で、サーバーの後方に移動する。移動はするが、サーバーのフットフォールトを見るので、横にはずれない。サーブ後はすぐに所定の位置に戻る。ただし、壁まで下がり、なおサーバーの邪魔になるようであれば、1歩左にずれる。
- ⑥ラリーに入る時、フラッグは音をたてずに、持ち手側の脚の後ろに回す。(写真3)



写真1-①



写真1-②



写真2

(2) ラリー時の基本姿勢 (写真3、4)

- ①担当するラインの延長線上に左足(左利きであっても)がくるように位置取りをして、ややコートの内側からラインを見る。左足が前になるように、両足は開き両ひざを曲げ、レシーブするような低い姿勢でボールに集中する。
- ②フラッグは、前から見えないように、持ち手側の脚の後ろに回す。
- ③フラッグを持たないほうの手はひざの上には置かない。
- ④ボールが担当するライン方向に来たら、ボールより先にライン上に目を移し、ボールと床の接点を見て判定する。
- ⑤ラリー中は、自分の担当ライン方向にボールが来る可能性がある場合は、写真4のように低い姿勢をとる。そうでない場合は、写真3のようにやや高い姿勢をとるようにして、必要に応じてこの2つの基本姿勢を使い分けながら判定に備える。



写真3



写真4

(3) ボールイン (写真5)

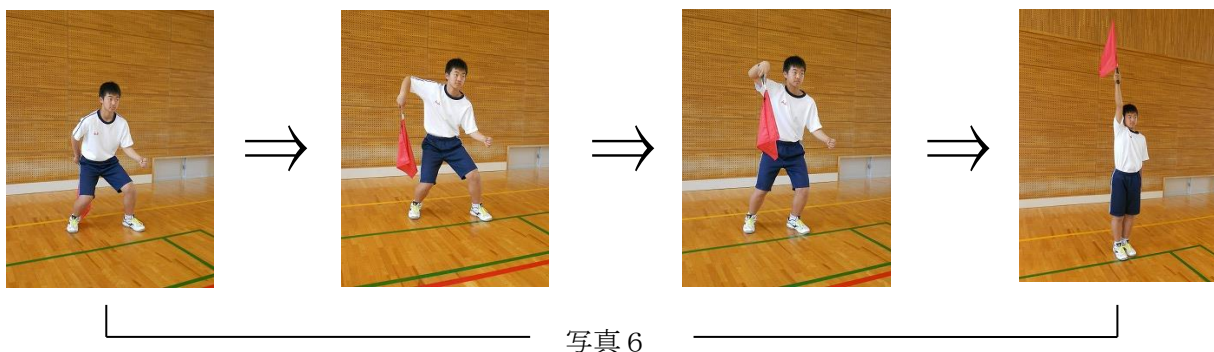
- ①まず構えた姿勢で判定を行い、すばやくフラッグシグナルを示しながら姿勢を正す。シグナルはひじを伸ばしてフラッグでラインを指す。体と腕(フラッグ)の角度は45度を保つ。
- ②視線を主審に向けて、アイコンタクトをとる。
- ③主審がアウト、イン、ボールコンタクトなど反則の種類(以下 反則の種類)のシグナルを示し始める時に姿勢を戻す。(写真1)
- ④目が合わない場合も、主審が反則の種類を示し始める時に姿勢を戻す。(写真1)



写真5

(4) ボールアウト (写真6)

- ①まず構えた姿勢で判定を行い、写真のような連続的な腕の動きで、すばやく姿勢を正してフラッグシグナルを示す。かかとかからフラッグ先端までが一直線になるようにする。



- ②視線を主審に向けて、アイコンタクトをとる。
③主審が反則の種類シグナルを示し始める時に姿勢を戻す。(写真1)
④目が合わない場合も、主審が反則の種類シグナルを示し始める時に姿勢を戻す。(写真1)

(5) ボールコンタクト (ワンタッチ) (写真7、8)

- ①まず構えた姿勢で判定を行い、すばやく姿勢を正してフラッグシグナルを示す。シグナルはフラッグを体の前で垂直に立て、フラッグの先端にもう一方の手の平でふたをするようにあてフラッグと手でTの字を作るようにする。フラッグを持っていない方の手は指先をきちんと伸ばし、手はあごの高さにそろえる。後ろからも見える位置まで、フラッグを体から離す。



写真7



写真8

- ②視線を主審に向けて、アイコンタクトをとる。
③主審が反則の種類シグナルを示し始める時に姿勢を戻す。(写真1)
④目が合わない場合も、主審が反則の種類シグナルを示し始める時に姿勢を戻す。(写真1)

(6) アンテナ、ロープ、支柱、サイドバンド外側のネットに触れた時 (写真9)

- ①まず構えた姿勢で判定を行い、すばやく姿勢を正して当たった方のアンテナを指し、頭上でフラッグを左右に一往復振る。(フラッグを持つ手が顔の前に出るように)



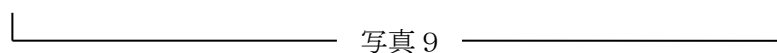
(1)旗の位置：外



(2)旗の位置：中



(3)旗の位置：外



- ②視線を主審に向けて、アイコンタクトをとる。
③主審が反則の種類シグナルを示し始める時に姿勢を戻す。(写真1)
④目が合わない場合も、主審が反則の種類シグナルを示し始める時に姿勢を戻す。(写真1)

(7) その他

①サーバーのフットフォールの判定

→ 該当するラインを指し、頭上でフラッグを左右に一往復振る。(写真9)

②ボールが天井に当たった場合の判定

→ 天井を指し、頭上でフラッグを左右に一往復振る。(写真9)

③視線を主審に向けて、アイコンタクトをとる。

④主審が反則の種類のスIGNALを示し始める時に姿勢を戻す。(写真1)

⑤目が合わない場合も、主審が反則の種類のスIGNALを示し始める時に姿勢を戻す。(写真1)

⑥ボールが床に触れたかどうか(パンケーキ)のプレーで、自分側のコートにボールが触れたことが確認できた場合は、写真4の姿勢のまま、フラッグを前に出し、床を2・3回たたくようなスIGNALを示す。

※タイムアウトの時は、休めの姿勢で待機する。

※セット間は、フリーゾーンで行われるチーム練習の邪魔にならないように、後ろに下がって座って待機する。

2. 1つのラリーにおける動きの流れ

(1) 自分の担当ラインに正対し、写真1の姿勢で直立する。

(2) サービス許可の吹笛で、サービス側のLJは写真1の姿勢のままフットフォールを判定する。レシーブ側のLJは写真3または4の姿勢で判定の準備をする。ラリー中は、写真3と写真4の姿勢を使い分けながら判定に臨む。

(3) ボールデッドになった時に判定する。(写真5～9) 判定の必要がない場合は、すぐに最初の姿勢に戻る。(写真1)

(4) 主審が反則の種類のスIGNALを示し始める時に最初の姿勢に戻る。(写真1)

3. 判定のしかた

(1) ボールと床の接点

写真10のように上から見るとラインに接しているように見えるが、実際には写真11のように接していない場合がある。そのため、姿勢を低くして見る必要がある。また、中学生がこのような場面での判定をより正確にできるようにするために、ラインの延長線上に左足がくるように位置して、ラインのやや内側からボールの接地面を見るようにするとよい。



写真10

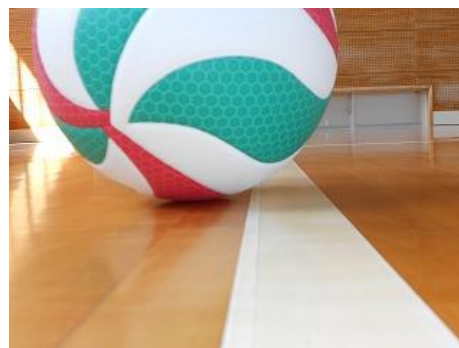

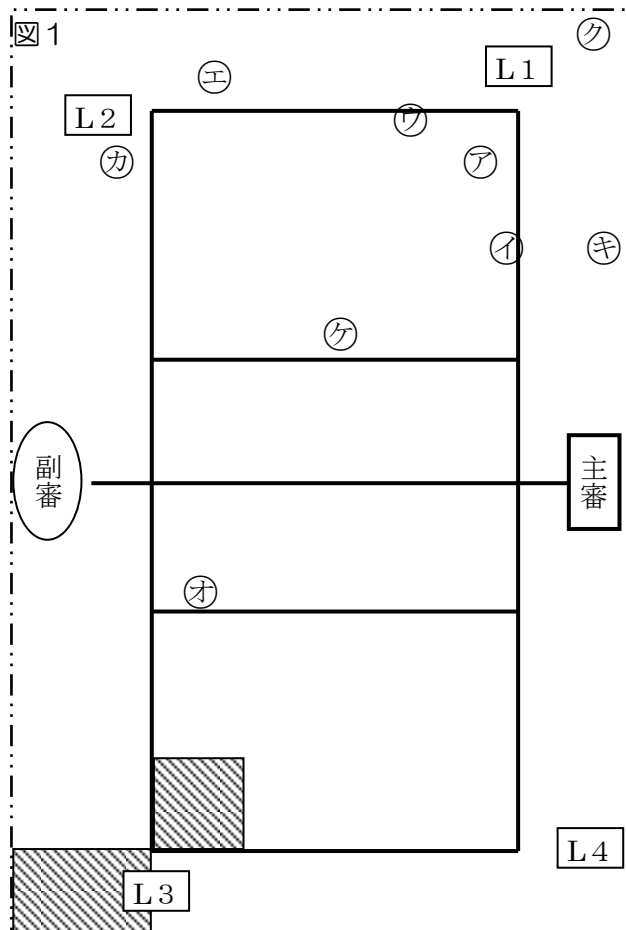


写真11

(2) ライン判定 (図1 及び下表)

- ①「一人一線」の原則で、担当ラインのイン、アウト等の判定を、責任をもって行う。
- ②ボールインは、担当ライン内側2m以内について判定する。
- ③ボールアウト (ボールコンタクトも含む) は、自分の担当ラインの垂直面を越えていくボールについて全部判定する。たとえ、自分の近くにボールが落ちても自分の担当ラインの垂直面を越えなければ、自分はシグナルを示さず、他の担当L Jに任せる。
- ④二人が同時に判定する場合(図1-ア、ク)は、のようなコーナーから半径2m以内のインボールや、エンドラインから見てもサイドラインから見てもアウトのボールは二人が同時にシグナルを示す。二人のシグナルがそろふことが望ましいが、差し違ひになった場合は主審の指示に従い、どちらかがフラッグを下げる。

位置	判定者	位置	判定者	位置	判定者
ア	L1 L2	エ	L2	キ	L1
イ	L1	オ	L3	ク	L1 L2
ウ	L2	カ	L3	ケ	誰も出さない



(3) ボールコンタクト (ワンタッチ)

中学生には、ボールコンタクトを見に行くのではなく、ライン判定を主に見るように指導する。

- ①相手からの攻撃に対するブロッカー、レシーバーのボールコンタクトを判定する。
- ②ボールコンタクトは、原則としてボールが落ちたコート側の L J 2人がシグナルを示す。ただし確実に確認できた場合は、ボールの落ちた反対側コートの L J がシグナルを出してもかまわない。また、はっきりボールコンタクトと判断できず、ボールがコート外に落下したら、その担当の L J がアウトのシグナルを示す。
- ③ボールコンタクトがあっても、ボールがコート内に落ちた場合はインのシグナルを示す。
- ④レシーバーがボールをはじいて自コート外に出した時もボールコンタクトのシグナルを示す。

4. トレーニング・マニュアル

ここでは、中学生がL Jとして試合に参加するために必要なルールに関する知識と、育成の基本的要領を示す。

(1) ルールに関する知識

L Jは、次のような内容について判定し、フラッグシグナルを示す。

- ①担当するラインのイン、またはアウト。
- ②レシービングチームがアウトボールに接触した時。(ボールコンタクト=ワンタッチ)
- ③サーバーのフットフォールト。
- ④ボールがアンテナに触れた時やサービスされたボールがネット上方の許容空間の外側を通過した時。
- ⑤ボールがネットの上方、許容空間外側のネットの垂直面を通過した時。
- ⑥選手がボールをプレーしている時、または、プレーを妨害しようとしてアンテナに触れた時。

⑦サービスが打たれた瞬間に、サーバーを除く選手がコート外へ踏み出していた時。
 少なくとも、①～③は確実に意識して判定できるように育成したい。慣れていくにつれて、④～⑦の内容についても理解して判定できるようになれば、高いレベルで役割を果たせるようになる。なお、⑦の判定については、フラッグを振るシグナル（写真9）を示す。

(2) 基本的トレーニング

①フラッグシグナルを、素早く・スムーズに示すトレーニング

《要領》 指導者が、「イン」「アウト」「ワンタッチ」「アンテナ」などと順不同で繰り返し判定の種類を言って、その判定に対応するシグナルを、生徒が正しく素早く・スムーズに示す。フラッグがない場合は、人差し指を伸ばした状態でさせても十分効果は期待できるので、一度に多くの生徒がトレーニングできる。大切なことは、判定した直後に迷わず正しいフラッグシグナルを示せるようになることである。（写真12）



写真 12

②実際にボールを打ってイン・アウトを判定し、判定に合うシグナルを正しく・素早く・スムーズに示すトレーニング

《要領》 写真13のように1本のラインに対して生徒が1～2名程度ずつ向かい合うように配置し、指導者がボールを打って、イン・アウトに対する正しい判定と対応するシグナルを正しく・素早く・スムーズに示せるように繰り返し行う。低い姿勢でボールと床の接点を見ることが基本である。「ラインから2m以内のシグナルを示さなければならないイン」「ラインから2m以上離れたシグナルを示さなくてよいイン」「アウト」の3種類を打ち、シグナルを示すべきボールと示さなくてよいボールの違いを理解させる。ボールが落ちる前にシグナルを示してしまう、ゆるいボールに対してシグナルが示されないなどがないようにシグナルを示すタイミングについて理解させる。特に、ラインぎりぎりに落ちたボールの判定について、差し違い（同じボールに対してインとアウト両方のシグナルが示されること）があった場合は、確認しながら行い、ボールの見方についてよく練習させる。



写真 13

(3) 発展的トレーニング

①ブロッカーやレシーバーをつけて、イン・アウト・ボールコンタクト（ワンタッチ）を判定してシグナルを示すトレーニング（写真14）

《要領》 ブロッカーやレシーバーをつけて、強打・軟打・フェイントを打つ。ボール、ブロッカーの手や指先、レシーバーを視野に入れることに慣れさせる。ボールコンタクトは、はっきり見えた場合だけシグナルを示す。確信がない場合は、シグナルを示すべきではないことを理解させる。ブロッカーの指や左右をかすっていくケースは、主審・副審からは非常に見にくいケースがあるので、原則としてボールが落ちたコート側のLJ2人がシグナルを示す。ただし確実に確認できた場合は、ボールの落ちた反対側コートのLJがシグナルを出してもかまわない。ライン際のレシーバーのボールコンタクトも主審の死角になるケースがあるので、ライン判定に注意しながら視野に入れることが大切である。



写真 14

(4) コンビネーションに関するトレーニング

①コーナーの判定や自分の近くにボールが落ちてもしグナルを示さないケースのトレーニング
《要領》 1番と2番、2番と3番の組み合わせのL Jが担当すべきコーナー近くのボールのイン・アウトの判定について、(2)の②と同様の要領でボールを出してトレーニングする。コーナー2m以内のインボールに対して2人が同時にシグナルを示すタイミングや、自分の近くにボールが落ちてもしグナルを示すべきではないアウトボールについて理解させる。

②ブロッカーやレシーバーをつけた、複数のL Jによる判定及びシグナルを示すトレーニング

《要領》 複数のL Jを配置して、写真15の要領で行い、判定及びシグナルを示す。コーナー2m以内のインボールに対して2人が同時にシグナルを示すタイミング、自分の近くにボールが落ちてもしグナルを示すべきではないアウトボール、誰がボール・コンタクトのシグナルを示すべきかについて理解させる。



写真 15

③ゲーム形式でのトレーニング

《要領》 ゲームの中で、プレーに応じて位置や視野を適切に取りながら、判定しシグナルを示す。サービス～ラリー～判定～シグナル～シグナル終了までをスムーズに行う。

(5) アンテナ接触及び許容空間外側通過のボールに関するトレーニング

①アンテナ・ロープ・支柱・サイドバンド外側のネット等に触れた時に、タイムリーにシグナルを示すトレーニング

《要領》 アンテナ近くでプレーをしたり、レシーブしたボールがアンテナ等に接触するような状況を作り出したりして、アンテナ・ロープ・支柱・サイドバンド外側のネット等に触れた時に、最も見やすい位置にいるL Jが、タイムリーにシグナルを示す。

②許容空間外側を通過するボールに対する判定及びシグナルを示すトレーニング

《要領》 以下に示した6つのケースについて、許容空間外側を通過したり、通過しなかったりするようなボールをさまざまな角度から打ったり、返球したり、取り戻したりする。どの位置のL Jが見るべきかなどを理解させる。ボールのコースに入るために、極端に動いてライン判定がおろそかになったり、コースに入らないで判定すると不信感をもたれたりするので、動く範囲を十分に確認する必要がある。

- i) 許容空間外（アンテナの外側または上方）を通過してアウトになった場合は、チームの1・2回目の接触後は落ちた瞬間にアウトを示す。チームの3回目の接触後はネットの垂直面を通過した瞬間にアウトを示す。(図2)

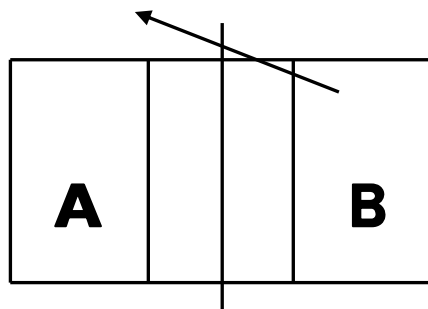


図 2

- ii) Bチームの1番の選手がレシーブしたボールが、相手コート（Aコート）のフリーゾーンに出て2番の選手が取り戻した場合は、何もしない。（図3）

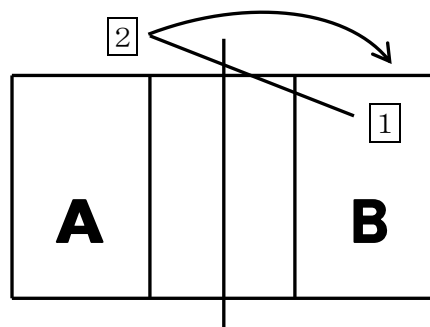


図3

- iii) Bチームの1番の選手がレシーブしたボールが、相手コート（Aコート）のフリーゾーンに出て2番の選手が取り戻し、許容空間内を通過した場合は、ボールがネット上を完全に通過した瞬間に、頭上でフラッグを一往復振る。（図4）

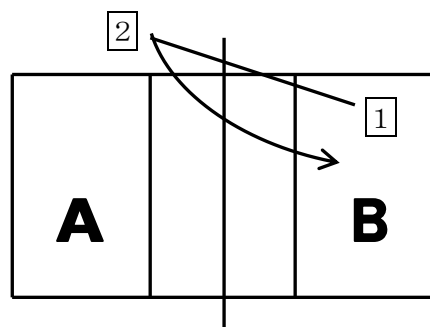


図4

- iv) Bチームの1番の選手がレシーブしたボールが、相手コート（Aコート）のフリーゾーンに出て2番の選手が取り戻しに行き、アンテナ内側のネットに触れたり、Aのコートの床に触れたりした場合は、何もしない。（図5）

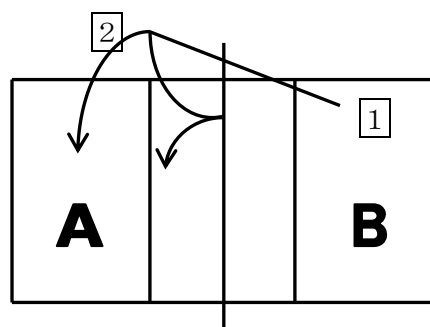


図5

- V) Bチームのコートから許容空間を通過して、Aチームのフリーゾーンにボールが向かって行った場合に、Bチームの選手がボールに触れたら、ボールに触れた瞬間にそのコースの人が頭上でフラッグを一往復振る。（図6）

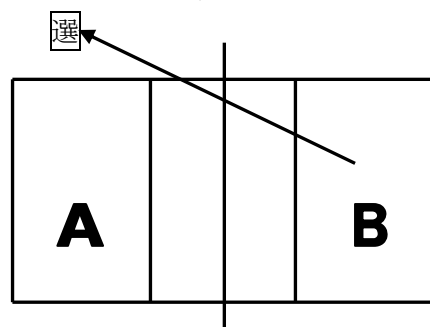


図6

- VI) Bチームの1番の選手が、フリーゾーンから打ったボールが、許容空間外を通過してAチームのコートに向かっていく場合、チームの1・2回目の接触後は、ボールが床に触れるか選手に触れた瞬間に頭上でフラッグを一往復振る。チームの3回目の接触後はネットの垂直面を通過した瞬間に頭上でフラッグを一往復振る。（図7）

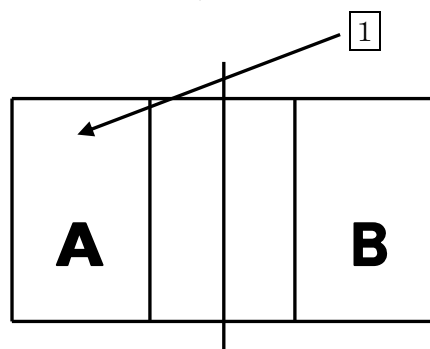


図7

II アシスタントスコアラ―編

1. リベロに関するルール及び取り扱い（別紙リベロ・プレーヤー・システムについての付則参照）

A Sは、次のようなリベロに関するルールを理解した上で任務に取り組む。

- ①チームは、選手の中から専門的な守備のためのリベロを2人まで登録することができる。
- ②リベロはチームキャプテンにもゲームキャプテンにもなれない。
- ③リベロは、チームの他の選手と対照的な色のユニフォームまたはベストを着用しなければならない。
ユニフォームの場合は、ユニフォームのデザインは異なってもよいが、ナンバーはつけなければならない。
＜例1＞他の選手と対照的な色で、リベロ2人は同じデザインのユニフォーム。
＜例2＞リベロ2人ともユニフォームと対照的な色のベスト。2人の色も明確に違う色。
＜例3＞他の選手と対照的な色で、リベロ2人の色の識別もできる別々のユニフォーム。
＜例4＞1人はベスト。1人は他の選手と対照的な色のユニフォーム。リベロ同士のベストとユニフォームの色の識別も明確にできる色でなければならない。
- ④リベロと他の選手との交代の間には、ラリーが完了していなければならない。（ただし、負傷や病気、または相手チームの反則によって、ローテーションをしなければならなくなった場合を除く）リベロが、コートから出る時は、入れ替わった選手とのみ交代することができる。
- ⑤交代は、ボールがアウトオブプレーの間で、サービス許可の吹笛の前に行われる。
- ⑥サービス許可の吹笛後に行われる交代は、サービスを打つ前であれば拒否されないが、そのラリー終了後に注意される。同一試合中に繰り返せば、遅延の罰則を適用される。
- ⑦不法なリベロの交代が生じた場合は、ローテーションの反則と同様の処置をする。
＜例1＞交代したばかりのリベロが、ワンラリーおらずに再び交代した場合。
＜例2＞リベロが、交代した選手ではない他の選手と交代した場合。
＜例3＞選手交代をしてベンチに下がっている選手が、リベロと交代してコートに入った場合。
※主審・副審が間違いに気づいた場合は、直ちに指摘して正しく直させることができる。
※A Sは、Aチーム・Bチームそれぞれ1名の担当がいることが望ましい。

2. 位置

- (1) 記録席で、記録員の両隣に座り任務を遂行する。
- (2) 1試合を通して同じチームを担当する。チェンジコートの際は、席を替わる。

3. 役割

リベロの交代が正規の方法で行われているかを確認し、リベロコントロールシートに交代の事実を記入する。また、必要に応じて記録員の補佐をする。

(1) 試合及びセットの開始前

- ①リベロコントロールシートの準備をする。
- ②リベロがゼッケンを使用する場合は、公式練習中に番号とゼッケンの色を確認する。

(2) 試合中

- ①リベロの交代を正確に記録する。
- ②リベロの交代時に反則があった場合、あるいは、疑わしい場合も記録員に伝える。その後の処置は、審判員の指示に従う。
- ③スコアボードの得点が正しいか確認する。

※注意事項

- ①選手交代をしてベンチにいるべきスターティングプレーヤーが、誤ってリベロと交代してコートに入る場合がある。いつもリベロと交代するスターティングプレーヤーが選手交代をした場合は、特に注意する。
- ②各チームでリベロの交代パターンが決まっているが、自分の思いこみでコントロールシートに記入しないように注意し、必ずナンバーを確認して記入すること。
- ③リベロが2人いるチームの場合、2組の交代が同時に行われることがある。

(3) 試合終了時

- ①リベロコントロールシートにサインをし、確認のためにその用紙を提出する。
- ②公式記録用紙にサインをする。

4. 実際の手順

(1) 試合前

- ①コート、試合番号、チーム名など、コントロールシートに欄の設けてある内容について、必要に応じて記入する。

(2) トスの後

- ①記録員からリベロのナンバーを聞き、シートに記入する。または、リベロがゼッケンを使用する場合、ゼッケンの色を確認しシートに記入する。

(3) 試合中

- ①リベロの交代が行われるごとに、進行中のセットの欄の該当するチームのリベロの欄に、交代選手のナンバーとその時の得点を記入する。得点の最初の数字は、常に交代したチームの得点である。
- ②リベロと交代した選手がコートに戻った時は、その時の得点を下枠に記入する。
- ③リベロの再登録が行われた場合は、新しいリベロのナンバーをシート内の所定の欄に記入する。リベロが再登録されても、手続きの要領は同様である。
- ④第1セット終了後に、Aチーム担当者とBチーム担当者の席を替わる。3セット目は、13点のチェンジコートの際に席を替わる。

(4) 試合終了後

- ①リベロコントロールシートにサインする。
- ②記録用紙にサインする。
- ③確認を受けるために、シートを審判員に提出する。

5. トレーニング・マニュアル

ここでは、中学生がASとして試合に参加できるようになるための、育成の基本的要領を示す。

(1) 基礎的トレーニング

- ①リベロの交代がどこでどのように行われるかを理解させる。
- ②1組だけで行われるケース、2組同時に行われるケースについて理解させる。
- ③試合を再現しながら、試合のどの場面でリベロが交代するのかを理解させ、実際にシートを使用して基本的記入要領をさせてみる。

(2) 発展的トレーニング

- ①正しくない交代のしかた、記録員に通告しなければならないケースについて理解させ、その際の通告のしかた、シートへの記入のしかたについて理解させる。
- ②練習試合等を通して、実際に行われている試合の流れの中で、どのくらいのスピードで行わなければならないものかを感じさせながら実践させる。

